

# 現地調査報告

## エチオピア・アブロー近郊における パライバトルマリン鉱山ラッシュ

著者：ハイマノット・シサイ (Haimanot Sisay)

編集：ヴィンセント・パルデュー (Vincent Pardieu) 地図制作：レオナール・コルニュ  
(Léonard Cornuz)

2026年7月4日



エチオピアのアブロー近郊で新たに発見された、見事な大粒のパライバトルマリン原石を確認しているところ。大きい方の原石は43カラット、小さい方は10カラット超で非常に高い透明度を持つ。撮影：エフレム・ボガレ (Efrem Bogale)。

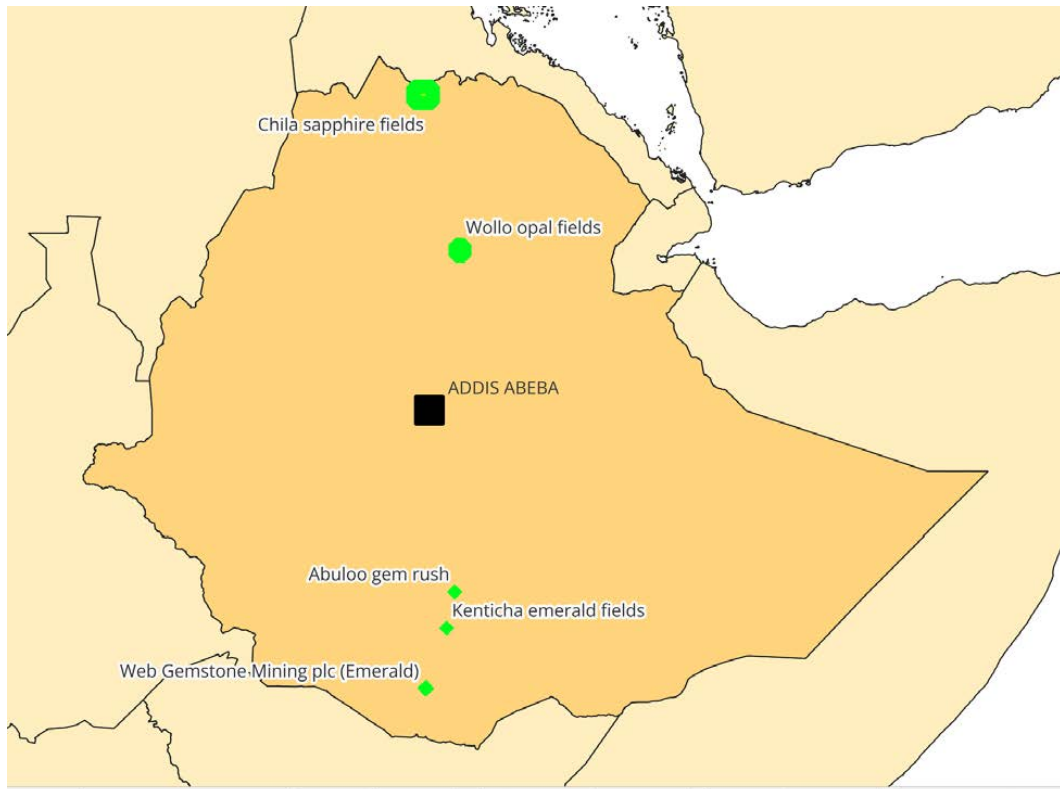
## はじめに

私が最初にエチオピアでプライベートトルマリンが発見されたという話を耳にしたのは2026年5月25日のことだった。シャキソにいる知人の一人から「プライベート」という言葉を聞かされたのがきっかけである。その人物は買い手を探しており、また、その石が本当にプライベートトルマリンであるかどうか、私たちのラボであるアフリカ宝石学研修所（Africa Gemological Training Institute、AGTI）による鑑別確認も求めている。

2018年にバンコクのGIAで学んだ後、私は2024年にここエチオピアでアフリカ宝石学研修所（AGTI）を設立した。同研修所では宝石学やジュエリーのファセットカット（研磨）を教えるとともに、宝石鑑別サービスも提供している。

私は彼らに、鑑定できるようにアディスアベバまで石を持ってきてほしいと伝えた。しかし彼らは私たちのラボに届く前に買い手を見つけてしまい、結局その一群（パーセル）を私たちが目にすることはなかった。この取引が秘密のままであることは長くは続かなかった。まもなく、あるプライベートトルマリンの一群が、報告によれば2億エチオピア・ブル以上、すなわち100万米ドルを超える金額で売却されたことが、アディスの宝石取引業界で広く知られるところとなった。

オロミア州、シャキソ近郊のアブロー村付近で非常に高価値なトルマリンが発見されたというニュースは、エチオピアの宝石取引業界を瞬く間に駆け巡り、やがてエチオピア国外にも急速に広まっていった。この地域はもともとコーヒー、金、そしてエメラルド採掘で知られていたが、今回の新発見によって、これまでとは異なる次元の注目が一気に集まることとなった。



エチオピアにおける主要な既知の宝石鉱床の位置を示す地図。エチオピアは1990年代に発見されたオパール鉱山ですでに世界的に知られていたが、その後（ウェブ村付近、後にシャキソ近郊のケンティチャで発見された）エメラルド、そして北部ティグレ州チラ付近のサファイアと発見が続いた。アブロー近郊でのプライベートマリンの発見は、エチオピアが宝石業界を驚かせ続けていることを示している。地図制作：レオナルド・コルニョ。

6月上旬までに、タイ、ドイツ、スイス、ブラジル、スリランカ、インドなど各国から国際的なバイヤーたちがアディスアベバやハワサに姿を見せ始めた。地元のディーラー、とりわけシャキソ近郊のエメラルド採掘エリアで活動していた者たちは、他の石の取引をほとんど止め、この新しい美しい石に注目を集中させるようになった。それは当時も今も、街の話題の的であり続けている。

私自身は、地元の知人や宝石ディーラー、そして零細採掘者たちからデータを集め始めるとともに、数人の友人にもこのニュースを共有し、助言を求めた。GIA時代の同級生であり、数か月前に私とともにサファイア鉱山を訪れたスイス人地質学者レオナルド・コルニョ、そして2025年にツーソンで知り合ってから、今も連絡を取り合っている宝石学者で、レオナルドの師でもあり友人でもあるヴィンセント・パルデューである。

ヴィンセントは私に、現地を訪問することは可能かと尋ねてきたが、当時の状況は非常に混沌としていた。アディスでは現地に行くのは安全ではないという噂が流れており、とりわけ、この発見のニュースを受けて反政府勢力とされる集団がこの地域で活動しているとの情報や、彼らが採

掘現場の支配を狙って地域に移動してきたとの報告も耳にしていた。これは、エチオピアで最も人気のある SNS である TikTok に投稿された動画にも映っていた。そのため私はヴィンセントに、状況が安全になるまで待つよう助言した。

2026 年 6 月 18 日に SSEF がエチオピアにおけるプライベートトルマリン発見に関するプレスリリースを発表すると、多くの人々が私にこのニュースが本当かどうかを尋ねるようになった。その頃には私はすでにアディスアベバで魅力的な石の一群をいくつか実際に見ることができていたため、2026 年 6 月 25 日に動画を撮影・投稿し、エチオピアで確かに何かが起きていることを確認する形とした。

その少し後、6 月 27 日にヴィンセント・パルデューは、バンコクの友人の一人がエチオピアを訪れて入手した石について、パリの LFG (Laboratoire Français de Gemmologie、フランス宝石学研究所) およびバンコクの C.デュネーグル研究所の同僚たちと共同で行った予備研究の結果を発表した。その予備研究によれば、アブロー産の石のうち銅を多く含むものはプライベートトルマリンと呼ぶ資格がある (LMHC 情報シート第 6 号のプライベートトルマリンに関する用語定義に基づく) 一方、外見が似ていても鉄によって発色しているものはプライベートとしての資格を持たないことが示された。パルデューらによるこの知見は、翌日、ドイツ人バイヤーがアディスで入手した石を調べたドイツ・イーダーオーバーシュタインの DSEF のドイツ人宝石学者たちによっても裏付けられた。

最も難しかったのは、この違いが紫外・可視・近赤外 (UV-Vis-NIR) 分光法によってしか判別できないという点だった。この機材は当時まだエチオピア国内には存在していなかった。もちろん、アブロー産の新発見トルマリンの性質や多様性を理解するためには、今後さらなる研究とラボでの検査が続けられるべきである。

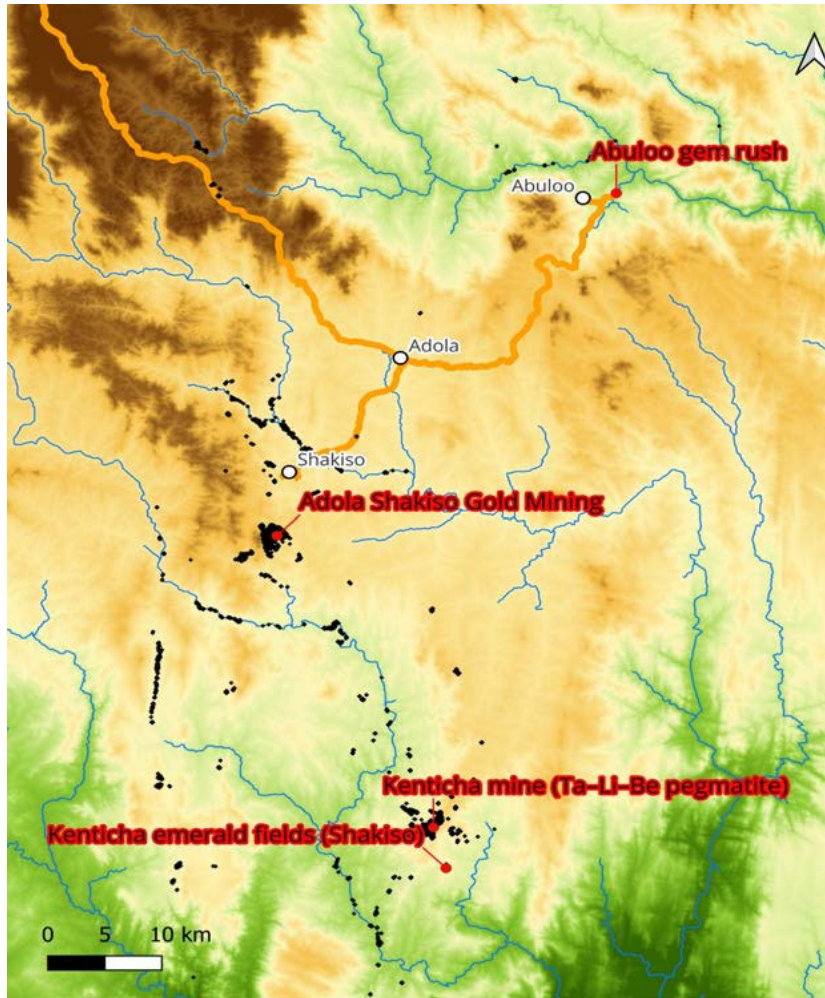


Ararsa 氏 (Qolansa Mining and Trading Plc、CEO) のご厚意により、彼らの宝石の動画・写真を撮影し、評価する機会をいただいた。撮影：ハイマノット・シサイ。

採掘現場の関係者とアデイスで会って話を聞いたところ、反政府勢力の到来後、採掘は一時停止していたという。しかしその後、地元当局とアバ・ガダ（伝統的な地域指導者）が彼らを説得して地域から退去させ、地元住民が採掘を継続できるようにしたとのことだった。

彼らの退去後に治安が改善し、人々が再び採掘を始めたという知らせを受け、私はヴィンセントとレオナルに、依然として危険ではあるものの、自分自身でリアルタイムのデータを収集するために現地へ行くことを考えていると伝えた。

もちろん、安全上の懸念から、私は家族には鉱山へ行くとは伝えなかった。ハワサへサンプルの石を購入しに行くときだけ話しておいた。レオナルとヴィンセントは同行できなかったものの、マッピングの実施方法や有用なデータの収集方法について、私と私のチームに助言をくれた。私は一人で行ったわけではない。友人のテウオドロス、アシェナフィ、サミュエル、ハジ、そしてイエアブシラが、この遠征を実現する手助けをしてくれた。



アディスからの移動時における、シャキノ周辺地域での私たちの遠征ルート（オレンジ色）を示す地図。発見現場はアブロー村の東約2キロメートルに位置する。アブロー村自体は、シャキノの北東約50キロメートルに位置しており、シャキノはケンティチャにあるエメラルド鉱山で有名だが、そのケンティチャはシャキノの南東約50キロメートルの地点にある。注：黒い点はすべて採掘現場（その大半は金の採掘現場と見られる）。地図制作：レオナルド・コルニユ。

## 現地調査

私たちの遠征は 2026 年 6 月 25 日、アデイスアベバから始まった。

アデイスからハワサまでは、約 4 時間かけて車で移動した。ハワサからシャキノまではさらに 3 時間半ほど走り、その夜はシャキノに宿泊した（前ページの地図を参照）。

2026 年 6 月 26 日の早朝、私たちは起きてアブローへ向けて出発し、途中アドラを通過した。アドラはかつて「キブレメンギスト」と呼ばれていた土地で、これはハイレ・セラシエ皇帝によって付けられた名称であり、「王への恩寵」あるいは「統治者への恩寵」を意味する。

アブロー村に到着すると、私たちはトラックを駐車し、バイクステーションでオートバイに乗り換えた。ライダーたちはオートバイでの輸送サービスを提供する若い男性たちで、少なくとも私が聞いた限りでは腕の確かさで知られているという。移動時間はわずか 10 分程度だったが、それでも少し怖い体験だった。



採掘現場付近のオートバイ駐車場。アフリカの多くの鉱山地域と同様、オートバイは町から採掘現場へ移動する最も効率的な手段である。撮影：ハイマノット・シサイ。

オートバイを降りた地点から、私たちは下り坂を約 20 分ほど歩いた。採掘現場に近づくにつれ、大勢の人々が掘削する音や、近くの小川で土砂を洗う人々の音が聞こえ始めた。採掘作業は、木々に覆われたエリアの中、2 つの丘の間を流れる小川に沿って行われていた。鳥肌が立つほどの強い興奮を覚え、木々の向こうに広がる鉱山をこの目で見たいという思いに駆られ、思わず先を

急ぎたくなった。

ついに現場に到着すると、そこにいる人々の数、その興奮、緊迫感、不確実性、そして皆が持つ強い思いが、私が決して忘れることのない光景を作り出していた。採掘現場に立ち、私は圧倒されるような光景を目の当たりにした。3,000 人を超える人々がこのエリアに詰めかけ、掘り、洗い、運び、買い、そして売っていた。

ほぼすべての露天採掘坑は、武装した男性たちによって警備されていた。現場にいた人々の多くは友好的だったが、警備員の一人は、私の友人がカメラで撮影しているのを見てあからさまに不快感を示し、その友人の顔に AK-47 を向けた。私の友人にとって、生涯忘れられない出来事になるだろう…。しかし友人が謝罪の言葉を述べ、私たちがより友好的な人々のところへ移動すると、その後は特に問題なく進んだ。とはいえこれは、レオナルドとヴィンセントが普段から私に言っていた通り、宝石ラッシュの現場では物事が張り詰めた空気になりうるということを、改めて思い知らされる出来事だった。

そうした理由から、私たちはこのフィールド報告において、私自身を除き、人物の顔がはっきりと分かるクローズアップの写真は掲載しないことにした。



左：アブロー村付近にある主要な採掘現場の最初の眺め。数百人の地元住民が、簡単な手道具を使って地面を掘っている。現場は丘に挟まれた小さな谷、小川沿いに位置している。右：採掘現場に到着した様子。誰もが自分の作業に集中していた。撮影：ハイマノット・シサイ、イエアブシラ。



採掘現場全体の様子。敷地面積は2ヘクタール弱。撮影：ハイマノット・シサイ、イエアブシラ。



アブロー村付近の主要な採掘現場のその他の様子。数百人の地元住民が、簡単な手道具を使って地面を掘っている。撮影：ハイマノット・シサイ、イエアブシラ。



主要な洗浄エリアの様子。ここで作業している人々の大半が女性であることに注目したい。撮影：ハイマノット・シサイ。

私はこれらのプライベートルマリンの最初の発見について、2つの異なる話を耳にした。アデイスでは、ある村人がトイレの穴を掘っている最中に石を見つけたという噂があった。しかし、私が鉦山に到着した際には、それは事実ではないと聞かされた。現地で出会った人々によれば、この石はしばらく前、伝統的な金の探査（プロスペクティング）の最中に最初に発見されたという。

鉦山で人々と話をする中で、主な労働力はアブローおよびシャキソ、アドラ、ケンティチャといった周辺地域の住民で構成されていることが分かった。彼らが最前線の採掘者であり、一方でバイヤーはエチオピア各地から集まってきている。

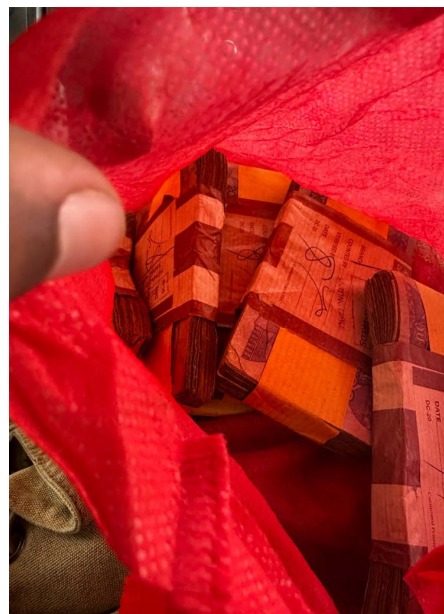
このラッシュは、コーヒー（そしてトウモロコシ）を中心とした農業、金採掘、エメラルド採掘に依存していた地域経済を、すっかり作り変えてしまった。全国的なインフレと社会経済的な困難が広がる中、この発見はまたとない、人生を変えるほどの「くじ」のような存在となっている。実に多くの人々が、プライベートルマリンの採掘に挑戦するため、それまでの仕事を辞めてやってきた。すでに幸運にも並外れた石を見つけ、人生を一変させるだけの資金を得た人々もおり、それが他の人々にとっても採掘に来る動機となっている。金採掘で得た資金を元手に、プライベートの採掘坑へ再投資し、さらなる富を狙う人々も多い。しかし、宝石の品質に対する地元の理解がまだ非常に乏しいため、この発見による経済的影響の全体像を測るには時期尚早である。

現場での商取引は、迅速かつ変動が激しい。採掘坑での取引は完全に現金ベースで行われており、

やり取りされる紙幣の量は驚くほど膨大である。ダッフルバッグが紙幣の束で文字通りあふれている光景も珍しくない。地元のディーラーが最初買い付ける機会を得ることが多く、一方で特別な石や質の高い荷は、二次交渉のためシャキノ、アドラ、ハワサといった近隣の拠点都市へと送られる。

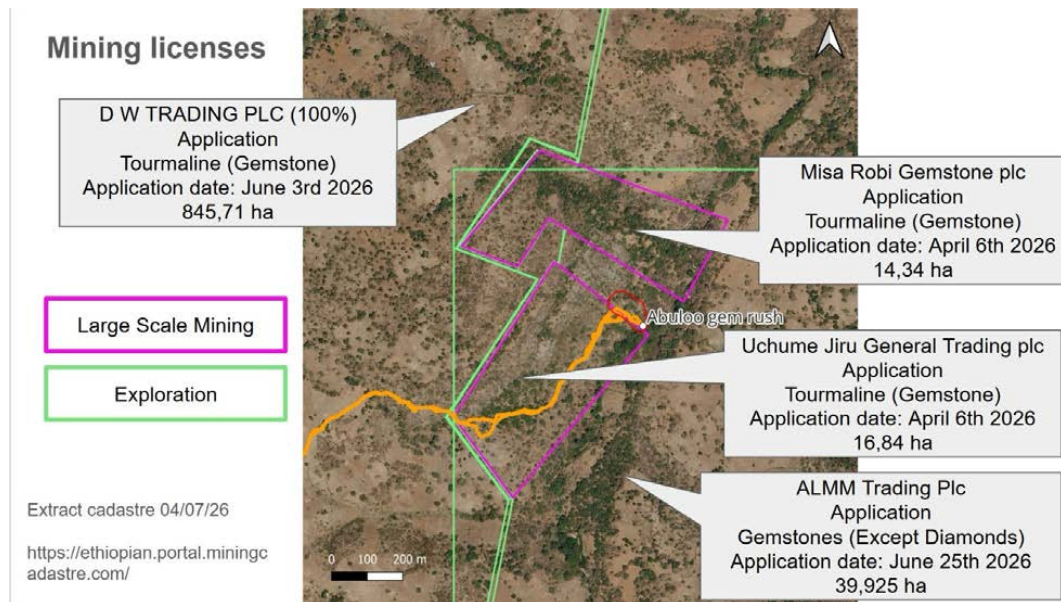
地質学的に見ると、この鉱床からはネオン・パライバタイプの石、濃いブルーのインジコライト、ピンク、グリーン、ブラックの結晶など、驚くほど多様なトルマリンが産出している。これらは深さ約 6 メートルまでの二次的な表層土壌の中に存在する。石の透明度は、不透明なものから、肉眼で内包物が見えないもの（アイクリン）、あるいはルーペでも内包物が見えないもの（ルーペクリン）まで幅広い。ほとんどの石は 2 グラム未満だが、私自身、最大 8.6 グラムに達する注目すべき標本も目にした。すべて、シャベルやピック、そして運搬・洗浄用の袋といった簡単な道具を使って採取されている。

20 か所を超える露天採掘坑が、隣り合うように稼働している。採掘者たちは地表付近でトルマリンを見つけ、深さ約 6 メートルまで掘り進む。土壌が軟らかいため、多くの採掘者が掘り出した土を坑の縁から遠ざけず、そのまま坑口の縁に積み上げてしまう。これは深刻な危険を生んでおり、緩んだ土砂が容易に坑内へ崩れ落ちる恐れがある。採掘坑そのものが必ずしも危険なのではなく、基本的な安全対策が欠如していることこそが、人命を奪う原因となっている。



左：アブロー付近で手道具を使って掘る人々。右：採掘現場で見かけた現金でいっぱいの袋。撮影：ハイマノット・シサイ。

採掘現場で数時間過ごした後、私たちは安全上の理由から町へ戻った。反政府勢力が夜間には今も時折この地域を訪れるという話を聞いていたためである。ハワサでいくつかの石を見た後、私たちは6月29日にアデイスアベバへ戻った。



エチオピアの鉱区台帳 (cadastre、<https://ethiopian.portal.miningcadastre.com/>) を確認したところ、興味深いことに、複数の企業が2026年4月以降—つまり私がこの発見について初めて耳にする約1か月前から—すでにトルマリン採掘ライセンスを申請していたことが判明した。地図制作：レオナルド・コルニョ。

無事に戻ってこられたことをうれしく思うと同時に、一生に一度とも言える出来事—アブローでのトルマリン発見とエチオピアにおける宝石ラッシュ—を目撃する機会を逃さなかったことを、私は嬉しく思っている。

今後については、エチオピア政府がアブロー鉱山の混沌とした状況に規制上の秩序をもたらすための取り組みを進めているようである。アフリカ宝石学研修所 (AGTI) としても、必要とされるであろう技術的な指導や体制面での支援を通じて、政府と協力していく準備ができている。

エチオピア人として、また宝石学者として、私の願いは、この恵みが強力かつ持続的な経済的機会として活かされ、エチオピアの人々に真に利益をもたらし、その暮らしを向上させるものとなることである。

現段階では、この宝石ラッシュが1年後にどうなっているのか、本当のところは誰にも分からない。時間が経てば分かるだろう。



この現地調査に同行し、無事に戻ることを助けてくれた友人のテウオドロス、アシェナフィ、サミュエル、ハジ、イエアブシラに感謝したい。また、ご自身の石を見せ、記録する機会を与えてくださった Arsasa (Ararsa) 氏、そしてこの遠征の準備や本フィールド報告の執筆を支えてくれた友人のレオナール・コルニュとヴィンセント・パルデューにも感謝申し上げる。最後に、アブロー、シャキノ、ハワサで出会い、温かく迎えてくださった皆様にも、心より御礼申し上げます。